

関係概念と実存概念

先月号に続き、宗教者と信仰者についての考察をさらに進めてみたい。

人間関係の中で規定された概念を関係概念と呼ぶことにすれば、“宗教者”は関係概念である。というのも、宗教者は信者や一般の人々との関係で成立する社会的存在だからである。彼らとの人間関係・社会関係の中ではじめて、宗教者は宗教者たりうる。“教祖”もまた関係概念である。教祖とは、人々から信奉され、教団の始祖となつてはじめて教祖になりうるからである。そして“信者”も、自分を指導してもらふ教祖や宗教者との関係において成立するという意味で、同じくまた関係概念である。

しかし、“信仰者”は関係概念ではない。信仰者には、他者との関わりはとくに想定されていない。自らを信仰的に指導する者がいる場合もあるし、いない場合もある。どのようなあり方にせよ、信仰的な自覚を有する者であれば、その人は信仰者でありうる。それゆえ、信仰者という概念は実存概念である。

宗教者という概念には、その宗教が人格全体を覆っているという印象がある。これに対して、信仰者の場合はまだそこまで到達しておらず、いまだ求道のさ中にあるというイメージが伴う。宗教者と呼ばれる、あるいはそう自認する者には、その宗教の看板に相応しい言動が要請され、また自らもそのように振舞うことになる。

聴くことは従うこと

多くの宗教者には弟子や信者たちがいるが、それは彼らを引き付ける力（カリスマ）が宗教者に生じているからである。古今東西の卓越した宗教者は、実によく語る。彼らが雄弁に語るのも、信者たちに心服してもらい、ついて来てもらう必要があるからだ。

熱心に聴くことには、その人を引き込ませる作用がある。書いたテキストを読むには、主体的な努力がある。テキストの内容が気に入らなければ、あるいは疲れたり眠くなったりすれば、それを閉じてしまえばよい。しかし、目はふさぐことができるが、耳はふさげない。聴従という言葉があるが、教を説いて聴かせることは、時に人々を文字通りに「聴き従わせてしまう」のである。話し手が自分より権威ある立場で、しかも有無を言わせない状況の下に語ってくれば、その話は否応なく耳の中に入ってくる。聴かせることは一つの力の行使でもある。信者を閉じ込めてひたすら教を説き続けていけば、洗脳やマインドコントロールのようになる危険性も出てこよう。

どんな宗教の教理書も、書斎で静かに目読する限りでは、宗教的情操を養う教養書にとどまる。教理それ自体は人を動かさない。教理がカリスマ的人格と結びついたとき、教理は教理としての力を発揮する。トルストイはいわゆる宗教者ではないが、ロシアの貴族や芸術家たちに老子の教を説いて、深い感銘を与えていたという。しかし、老子を語るのが文豪トルストイだったからこそ、深い感銘を与えることができたとも言えるのである。

しかし現代では、宗教者がどんなに雄弁に語っても、人々はただ暑苦しく思い、敬遠してしまうようなことのほうが多いのではないか。少なくとも、教を説けば、その場で弟子が出来

てしまうような時代ではない。その意味では、現代はたしかに宗教が不振の時代である。でも、宗教不振だからといって、必ずしも宗教不信の時代になったとは限らない。自分なりの流儀でスピリチュアルなものを求めている者は数多い。ただ、宗教者がそれを自分の宗教組織の中に取り込むのが困難になっただけである。現代は、宗教に関しては内省的な時代に入ったと言える。一人ひとりが自分の仕方での信仰心を抱き、またその人なりに教理を人格の内奥で育てていく。その成熟の歩みは千差万別であり、それで良しとすべきではないだろうか。

懐疑ある信仰こそ人間的信仰

信仰には懐疑が常につきまとう。いや懐疑がつきまとうからこそ、人間らしい信仰なのである。それで救われるのかと言えば、私は救われると答えたい。法然もまた「疑いながらも念仏すれば往生す」と語つたと伝えられるが、吉田兼好は「これもまた尊し」と述べている（『徒然草』第39段）。阿満利磨は『人はなぜ宗教を必要とするか』（ちくま新書）の中でこのことに言及し、「一人の人間が否定すれば、たちまち動揺するような救済原理では、すべての人を救うなど、思いも及ばない」（185頁）と説明している。

そもそも、少々疑つたからといって、神仏が揺らいだり消えてなくなるようでは、その神仏はとて超絶的存在者とは言えないだろう。信仰がどんなに動揺しても、真の神仏ならば決して揺れ動いてしまうことはないはずだ。逆に言えば、人間がどんなに自分の都合による願望を持とうとも、真の神仏ならば決してそれに動かされたりはしない。法然の言葉には、懐疑を持ちながらも救われているという確信があり、それを自由人の兼好が「これもまた尊し」と見事に受け止めているのである。

疑いがあってもよい。阿満によれば、それでも信ぜずにはやまないという意志が、宗教的世界成立の前提なのであって、この意志つまり「信心」こそ、宗教の核心を形成しているという（同書、190頁）。これは、私の言い方に直せば、信仰者が疑いを持ちながらも信じるということによって、はじめて宗教が宗教として現出するのである。その意味で、実存概念としての信仰者は、関係概念としての宗教者に「先行する」のである。

この点を押さえることが最も肝要である。自らは信仰者だという自覚を確保していれば、あとはそれに付随したものである。最初から宗教者のレッテルを貼ってしまうと、問題のすり替えが起こってしまいかねない。実際、宗教に関わる多くの人々（信者やその周囲の人々）がいかに宗教というものに苦しめられていることだろうか。けれども、その苦しみの大半は、宗教組織やその中の人間関係に自分が絡めとられているがゆえの苦悩なのである。ここで鍵になる概念こそ“宗教者”であり、まさに関係概念の最たるものである。信仰者としての実存を生き直すために、宗教者から距離を置くのが必要な時もある。

宗教とは、超絶的存在に自己を定位して生きることだ。人間をこの世界から解放し、自由にしてくれるのが、宗教なのである。真の信仰者は、自らを解放した自由な人間である。そうした自由な人間であればこそ、再びこの世界へと自由に関われる。そこでこそ、本当の懐疑に向き合うことができ、この懐疑によってさらに自らの信仰を深めていくことが可能になるのである。